

---

# なのはの中の少年

サイバスター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なのはの中の少年

### 【Nコード】

N7542U

### 【作者名】

サイバスター

### 【あらすじ】

この物語は、不思議な石の力でリリカルなのはの世界に行った少年がなのはの中で、なのはと共に成長する物語である

## 序章

この物語はある少年が不思議な石を手にしたところから始まる。

俺は、武藤直哉 16歳

俺は学校帰りに、不思議な石を見つけ持って帰ろうとしたら、石が輝きだして俺を石が吸収して、俺ごとどこかに消えていた。

俺は、気がつくとなんとあの不思議な石が俺の体に融合していた。

そして、俺はなのはが大好きな高校生だったことをその石が、学習し、石の力で俺はリリカルなのはの世界へ旅立ったのだった。そして、俺が気がつくところには、赤ん坊のなのはの中だった。

## キャラ設定

これはなのはの中の少年のキャラ設定です

名前 武藤直哉

年齢 16才

魔力光 なのはと同じ

能力 伝説の石レジエンドストーンによって得た能力は、3つ

一つ目は 原作キャラの中に入り、そのキャラの同意を得ることが出来れば、体を一時的に動かすことが出来る。

二つ目は、憑依して原作キャラに、直哉が知っているアニメや特撮キャラの力を、原作キャラに与えることが出来る

三つ目 時間移動が出来る

備考 直哉は、たまにだが、憑依してる原作キャラと会って話すことが出来る。その時の容姿だが原作キャラと同じ年齢になっている。

憑依してる時のキャラは  
魔力ランクはEXであるが、表示されるのは原作キャラのランクである。

これが現段階の設定です

## なのはと少年

直哉が、レジェンドストーンの力で、なのはの中に入って3年が過ぎたころ高町家では、事件が発生していた。

「お母さん遊んでよ」

「なのは帰ってきたら遊んであげるからね」

「お兄ちゃんお姉ちゃんなのはと遊んでよ」

「ごめんなのは私たちお店に行かないとだから後でね」

こうして桃子と美由紀恭也は、それぞれ家を出て行き、残ったのはなのはだけだった。

「はあーまた私一人か私が、わがまま言っではいけないのは、わかるけどやっぱり寂しいよ誰か私と友達になっつてよ」

なのはが、そう強く願った瞬間奇跡が起きたのだった。

直哉はこの3年間レジェンドストーンとしてなのはの中にいたのだった。

そして、レジェンドストーンは、なのはの願いを受けて、直哉ををなのはの体とリンクさせたのだった。

私は驚いた私が願いを言ったら私の体が輝いていたのだから。

そして、輝きが収まると、私の体から声が聞こえたのです。

こうして、少女と少年は出会った。奇妙な出会いかたではあるが。

## 自己紹介

なのはは、突然聞こえて来た声に驚いていた。  
三人称 side

「あなたは一体誰なんですか？」

なのはは、自分の中にいる人物に聞いた。

「初めまして、なのはちゃん僕の名前は、直哉といいます。よろしくね」

「はい私は、高町なのはですよろしくおねがいします」

「ところで直哉君は、何時から私の中にいたんですか？」

「そうだねなのはちゃんが、生まれた時からだよ」

「えーそうなんですか」

この日から、なのはは、一人で、留守番をする時間が好きになっていた。

その訳は、常に自分と一緒にいてくれる存在を、なのはが知ったからである。なのはの母親の桃子も兄の恭也も、なのはに笑顔が戻ってきていたので、安堵していた。

なのはが直哉の存在を知ってから、三年後なのはは清祥大付属小学校に、入学をしたのだった。

こうして物語は、少しずつ運命の時まで進んでいくのであった。

三人称 s i d e e n d

## 入学式

今日はなのはの清祥大付属小学校の入学式の当日の朝である。

三人称 s i d e

「私たちもいよいよ、小学生だね。直哉君」

「そうだねなのはなちゃん」

「もう直哉君。名前なのはって呼んでよ」

「え、でも」

「いいから」

「わかったよなのはこれでいい？」

「うん」

なのはたちは、学校に行き、入学式を終え、家に帰る途中なのはは、何者かに、誘拐されてしまったのだった。その犯人は、その昔なのはの父親に対し、恨みを持つ者の犯行だった。

果たしてなのはたちの運命は？

三人称  
s i d e  
e n d

## 誘拐

なのはは入学式を、終えて家に変える途中事件に、遭遇したのだ  
た。

三人称 s i d e

「直哉君帰って何して遊ぼうか？」

「何して遊ぼうって言うけど、僕はなのはの中から出られないんだよ。」

「ねえ直哉君私の中で、気持ちいいの？」

「うん」

「うれしいなあ」

その時なのはの前に、黒服を来た男たちが現れた。

「おじちゃんたち誰？」

なのは聞く。

「お嬢ちゃんおじちゃんたちお嬢ちゃんのお父さんに、頼まれて迎  
に来たんだよ」

なのはは走り出し逃げさそうとした時、男はスタンガンを出し、な

のはにショックを与え気絶させたのだった。

「あつ」

なのはたちは、黒服の男たちに拉致されてしまった。

そして直哉が、なのはに呼びかける。

「なのは、なのは大丈夫」

「あ、直哉君、ここはどこ?」

「僕にもわからないんだごめんなのは」

「そうか」

なのはは、落ち込んでいた

果たしてなのはたちは、この危機を切り抜けることができるのか?

三人称 s i d e e n d

## 誘拐後編

三人称 side

「ねえ直哉君どうにかして、逃げ出せないかな？」

「なのはそれは難しいよあの扉には、鍵が掛かってるしその鍵は、あの黒服の男たちが持つてるしね」

「ごめんねなのはを守れなくて」

「直哉君そんな事ないよ私は、助けられてるよ」

なのはたちが、話していると、黒服の男が入ってきた。

「きゃ何するの？」

男たちに捕まれなのはは、外に連れ出されてしまったのだった。

外に連れ出されたなのはが見たのは、黒服の男と戦う父と兄の姿だった。

恭也と士郎は、なのはを見つけると、なのはの背後にいた男が、なのはに拳銃を突きつけたのだった。

「お父さんお兄ちゃん助けてー」

なのはがそう叫ぶが、士郎たちは、なのはの安全のために、迂闊に動けなかった。

その時、突然空から無数の雷が落ちてきたのだった。

士郎たちは、黒服の男たちの隙を突き、なのはの救出に成功したのだった。

（あれは、まさか魔法なのか？一体誰が）

直哉は謎の雷について、考えていると、なのはたちの家に着いた。

三人称 s i d e e n d

## 苦悩

なのはが事件に巻き込まれてから、数日後。

直哉 side

僕は、あの事件以来なのはと、話すことを、怖がっている。

その理由は。

僕はなんて無力なんだ。

（確かに、僕はレジエンドストーンの力で、こちらの世界に来た。異邦人だけど、僕は、なのはと過ごした、この6年間をこんな事件のせいで、無駄にはしたくないけど、今の僕には、なのはを、守れる力が欲しい）

（僕は、元の世界でもやりたいことが見つかることが出来ずに、淡々と生きてきた高校生であった）

（趣味といえば、アニメやゲームが好きな高校生だった自分が、こちらの世界に来て、初めて自分が好きになった相手だからだ。だからこそ僕は、なのはを守りたいんだー）

果たして直哉の、思いはなのはに届くのか？

直哉 side end

## 苦悩　なのは編

なのはside

私は事件以降から、直哉君の声を聞かなくなり私は、少し寂しい毎日を送っていました。

「何でなんだろう？直哉君あれから私が呼びかけても、答えてくれないし」

私は、事件後から学校に行きだした時、クラスの皆が、なのはちゃん大丈夫だった？と会う人に同じことを聞かれ疲れて、お昼休みに屋上に行き、直哉君に私は喋りだしていた。

「ねえ、直哉君答えなくてももいいから、聞いてくれると嬉しいな」

「私は、この学校に入っているんな子達と友達になっただけど、本当の意味での友達は、直哉君だけなんだ。だから私は、直哉君が、苦しい時や悩んでる時は、直哉君の悩みとか私は、一緒に答えを見つけたいんだよ親友としてね」

(・・・ありがとう)

「え、何か言ったの？直哉君」

なのはが、直哉と話していると、なのはの目にある光景が映ったのだった。

なのはside end



喧嘩

なのはが、見つけた出来事は、金髪の女の子が紫色の髪の女の子と喧嘩をしている場面だった。

三人称 side

「大変早く止めなきゃ」

なのはは、そう言って女の子たちの元に、向かったのだった

「いいじゃないそれ私に、貸しなさいよ」

「いやああこの髪飾りだけは、絶対駄目ー」

金髪の女の子が、紫色の髪の子の大事な髪飾りを取ろうとしていた。

紫色の髪の女の子は、大事な、髪飾りを必死に、抵抗していたその時、なのはがやってきた。

そしてなのはは、いきなり金髪の女の子の頬を叩いたのだった。

三人称 side end

## 喧嘩後編

三人称 side

パシーン

「っあんたいきなりな二寸のよ、痛いわねー」

「痛い？でもね大事な物を、取られた人は、もっと痛いんだよ」

なのはがそう言うと、金髪の子が、なのはの頬を叩き返したのだった。

「このお返しよー」

パシーン

そして、なのはと、金髪の女の子との本格的な喧嘩が始まった。

そして意外なこと、なのはたちの喧嘩を、止めたのは紫色の髪少女だった。

「もうやめてー……………」

少女の声に驚くのはたち、そして喧嘩は、収まったのだった。

そして、放課後直哉の身に、異変が起きたのだった。  
その異変とは、直哉は己の無力を嘆いていた。そして、力が欲しいと願った直哉と融合しているレジエンドストーンが、直哉の願いを叶えたことにより、赤い宝石がなのはの手の中に降りて来たのだった。こうして、直哉は、赤い宝石となのはの中を行き来することが出来るように、なったのだった。

三人称 s i d e e n d

## 赤い宝石

直哉は、レジェンドストーンによって新たな能力をえたのだった。

そして、月日がたちなのはたちは、小学3年になったある日、なのはは、夢を見ていた。

その夢とは、見知らぬ少年が、正体不明の化け物と戦っている夢だった。

三人称 side

「ふああ変な夢を、見ちゃったなあ」

「おはようなのは」

「おはようなのは直哉君」

なのはと直哉は朝の挨拶をして、学校の制服に着替え、リビングに行く、母親の桃子からお願いをされていた。

「なのは道場に行って、お父さんたちを呼んできて」

「はい」

「お兄ちゃんお父さんご飯だよー」

「なのはおはようおっともつそんな時間か、今日はここまでにしよう  
恭也、美由紀」

士郎は、恭也と美由紀に、そう言った。

そして、なのはたちはリビングに行き、皆で朝食を取りなのはは、学校に行く為に、家を出たのだった。

三人称 s i d e e n d

## 赤い宝石2

学校に向かうため、なのはは、送迎バスが止まる停留所に向かっていた。

三人称 s i d e

「ねえ直哉君聞いてね？」

「何なのは」

「これからもよろしくね？」

「こちらこそなのは」

そしてなのはは、送迎バスに、乗るとなのははに声をかける人がいた。

「なのは」「なのはちゃん」

その声の主は、アリサ・バニングスと、月村すずかの二人だった。

「おはようアリサちゃんすずかちゃん」

彼女たちは、初めて会った時は喧嘩をしていたが、その後仲直りをし友達になったのだった。

そして学校に着きなのは、日常の生活を送っていた。

そして、放課後なのは、アリスとすずかと、家に帰宅途中で声が聞こえたのだった。

「助けて誰か助けて」

そして、なのははその声のしたほうに走って行った。

「あ、待ちなさいよなのは」

「待ってよなのはちゃん」

アリスたちもなのはの後を、追いかけて行った。

果たして謎の声の正体は？

三人称 s i d e e n d

### 赤い宝石3

なのはは、アリサたちと下校中に、謎の声が聞こえて来たのだった。  
なのは side

私は、謎の声がしたほうへ行くと、そこにはフェレットが倒れていた。

「直哉君大変だよフェレットさんが、倒れてるよどうしたらいいかな？」

「とりあえずアリサたちと合流しようなのは」

「うんそうだね直哉君」

私は直哉君と、相談してアリサちゃんたちと合流しようとした時、私の後ろから、声が聞こえ振り返るとそこには、アリサちゃんと、すずかちゃんがいました。

「一体どうしたのよなのは？」

「ねえアリサちゃんすずかちゃんこの近くに、動物病院あったっけ？」

私はそう言いながらアリサちゃんとすずかちゃんに、気絶しているフェレットを見せた。

なのは side end

アリサとすずかは、なのはの掌に乗ってるフェレットの様子を見て、急いで動物病院に向かったのだった。

そして、動物病院に着いて、診察の結果、フェレットは大きな怪我はしていなかった。

そして、なのはたちは、塾に行く為動物病院を出ようとした時、フェレットが何かを伝えるような目でなのはの後姿を見ていたのだった。

## 魔法との出会い

なのはたちは、塾にいる間も、あのフェレットのことが気になっていた。

3人は、結局両親に、フェレットのことを話して見ようということになったのだった。

その夜なのはと、直哉にまた謎の声が聞こえたのだった。

三人称 side

「助けて・・・助けてください」

「！！直哉君」

「ああ、行こうなのは」

そしてなのはたちは、家を飛び出し、声の聞こえたほうに、向かったのだった。

そこで、見たものとは、フェレットを追いかける黒い生物だった。

三人称 side end

## 魔法との出会い2

なのはは、動物病院から逃げってくるフェレットを見つけたが、同時にフェレットを追いかけている黒い影に、驚いていた。

三人称 s i d e

「あれは一体なんなの？」

なのはが混乱しながら、直哉に聞いていたその時なのはの耳に、直哉以外の声が聞こえて来たのだった。

「あれはジュエルシードの思念体です」

「ジュエルシードで何？え、ええー！直哉君このフェレット言葉を喋ったよー」

なのはは驚いていた。

「まったく今気づいたの？なのは？まったくいつも僕と喋ってるだから、動物が喋ったぐらいで、驚かないですよ」

「だって仕方がないじゃない驚くんだから」

なのはと直哉は、言い争いを始めていた。

その時、思念体からの攻撃が、なのはを襲うが、なのはは、何とか

思念体の攻撃をかわしたなのはだった。

「どうしたらいいの」

なのはは、今自分の置かれている状況に、付いていけなかった。

その時フレットがなのはに赤い宝石を手渡したのだった。

三人称 s i d e e n d

### 魔法との出会い3

三人称 s i d e

「これは？」

なのはがフェレットに聞いた。

「お願いですこれを使って、あれを封印してください」

「封印してとか言ってるけど直哉君どうする？」

「とりあえずなのは、とりあえず封印のやり方を聞いてみようよ」

「そうだね直哉君」

そして、なのははフェレットに、封印の仕方を聞いていた。

「まずレイジングハートを起動させてください。起動パスワード教えてください」

「では言います」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「不屈の心は、この胸に」

「不屈の心は、この胸に」

「この手に、魔法を」

「この手に、魔法を」

「レイジングハートセットアップ」

なのはがそう言うと、レイジングハートが起動して、なのはの服装が、光と同じ、白と青を、基調としたバリアジャケットを着ていた。

三人称 s i d e e n d

## 初封印

「何が起こったの」

なのはの服装が白と青を基調とした、B Jに変わりレジングハートが、赤い宝石状態から、杖状態になっていた。

なのはは、自分の置かれている状況を把握するのに、時間がかかっていた。

その時、ジュエルシードの思念体が、なのはを、襲ったのだった。

なのは s i d e

「クッ」

「なのは大丈夫？」

「何とか大丈夫だよ直哉君」

私は、なんとかジュエルシードの思念体の攻撃を、防御魔法で、防ぎました。

「早く封印を」

私が、防御魔法で思念体の攻撃に、耐えていると、フェレットが、私に言ってきた。

「なのはとりあえず思念体から離れて、体勢を立て直そう」

「うんわかったよ直哉君」

私は、直哉君の言うとおり、体勢を立て直す為に、思念体から離れて、集中したその時、私の心に浮かんだ呪文を言った直後レイジングハートが封印モードとなり、思念体の動き封じたのだった。

「ジュエルシードシリアルナンバー21封印」

私がそう言うと、思念体は消え、ジュエルシードは元の青い宝石になったのでした。

私が、レイジングハートで、触れるとジュエルシードはレイジングハートの中に、吸い込まれたのでした。

なのは side end

## 封印後

なのはは、フェレット共に、事情を聞くため、現場を離れ、近くの公園で、話を聞いていた。

三人称 side

「ねえ結局あれは、一体何だったの？」

なのはは真剣な眼差しで、フェレットに話を聞いていた。

「あれはジュエルシードの思念体です。」

「ジュエルシードと言うのは、先ほど封印した時に、見たと思いますが、青い宝石なんです、暴走すると大変危険な物なんです」

フェレットは、なのはに向け、そう言ったのだった。

「そんな物が、どうしてうちのご近所さんにあるの？」

なのはがフェレットに質問するとフェレットは気まずそうな表情をしていた。

「それは・・・」

そのとき直哉が、なのはにこう言った。

「ねえなのはとりあえず、そのフェレットさんには、家に来てもらおうよ。早く帰らないとお父さんたちに、怒られるよ」

「あ、そうだね直哉君。あのフェレットさん詳しい話は、家についてからでいいですか？」

なのはが聞くと、フェレットはわかりましたと言い3人は、なのはの家に、向かったのだった。

三人称 s i d e e n d

## 魔法の力

なのはside

私は、フェレットさんを家に、連れて帰ると、玄関前で私は、お兄ちゃんと御姉ちゃんに見つかってしまい、私は怒られるのを覚悟しました。

「なのはこんな時間に何処行っただんだ？」

「あ、お兄ちゃんそれは」

私は、お兄ちゃん聞かれてどう答えようと考えていたら、お姉ちゃんに後ろに隠していたフェレットを、見つけられお姉ちゃんがフェレットを抱きかかえ、お姉ちゃんが、私に助け舟を出してくれました。

「まあまあお兄ちゃんそんななのはを怒らなくてもいいじゃない」

「いや、しかしだな」

お兄ちゃんは納得していなかったが、お姉ちゃんがお兄ちゃんを納得させる為に、私に聞いてきた。

「なのはは、頭のいい子だからもうこういうことはしないよね？」

「うん、お兄ちゃんお姉ちゃんごめんなさい」

「ねえ、なのはもこう言ってるしゆるしてあげたら？」

「わかった今回だけだぞなのは」

「ありがとうお兄ちゃんお姉ちゃん」

私は、家に入ると、自分の部屋に向かいました。

なのは *s i d e e n d*

「なあ美由紀なのはに取りついてる者の正体わかったか？」

「ううんそれはまだだけど今ので、なのはが何かに取り付かれてるのは、わかったよ」

「そうか」

## 魔法の力2

なのはside

「ねえ直哉君もしかして、お兄ちゃんたちに直哉君の存在を気づかれたかな？」

なのはは、ベットの上で、直哉と話していた。

実は、なのはが、レイジングハートを、起動し魔法少女になった時、直哉と融合しているレジエンドストーンにも、変化が起きていたのだった。

その変化とは、レジエンドストーンの力が、なのはの覚醒と同時に、直哉だけでなくなのは自身もレジエンドストーンの影響を受けるようになっていたのだった。

「とりあえずなのはこれからのことを考えようよ。なのはは、どうしたいの？ジユエルシード集め手伝いたいのか？」

直哉はなのはに問いかけていた。

なのはと直哉は、部屋でフェレットに事情を聞くと、っフェレットはこう答えた。

「自分の名前は、ユーノ・スクライアと言います。僕は、この世界とは違う世界から来ましたなのはさんとなのは産の中にいる人、お

願います僕に力を貸してください。」

「え、ユーノ君直哉君の声聞こえるの？」

なのはが、ユーノに聞くと、ユーノは素直にはいと答えたのだった。

その後、なのはと直哉は、ユーノの協力に関しては二人で考える時間が欲しいと答え、現在に至るのだった。

「私としては、手伝いたいよ直哉君」

「そうか、とりあえず遅いからもう寝ようなのは」

「うんそうだねおやすみ直哉君」

「ああ、おやすみなのは」

なのは side end

### 魔法の力3

翌日なのはは、いつものように、学校に向かっていた。

学校では、何時もと代わらぬ日常が、なのはを待っていた。

友達、学校の授業、平穏な日常。直哉はなのはの中で、なのはにジュエルシード集めをさせるのはいいことなのか迷っていた。

だが、そんな直哉の考えとは、現実とは違っていくのだった。

「……直哉君この感じは？」

「ああ、これはジュエルシードの気配だなのは」

学校帰りに、なのはは、ジュエルシードの発現を感じて、急いで現場に向かうのだった。

そして、現場で二人が見たものとは？

## 二度目の封印

なのはは現場に着くと同時に驚いていた。そこには犬らしき化け物がいたからだ。

ジュエルシード発現直後ユーノも現場に向かっていった。

三人称 s i d e

「何あれ？」

なのはは、今までに見たことのない犬のような化け物を見て、驚いていた。

そして、犬のような化け物は、なのはの存在に気づいたその時、ユーノが現場に着きなのはにこう言った。

「なのは早く、レイジングハートの起動パスワードを唱えて」

ユーノがそう言うと、なのはが答えた。

「えー！またあの長い言葉を言うの？」

「それしかないんだから早く」

「きゃあああ」

なのはは、ユーノに言われたことをしようとした時、犬の化け物が、  
なのははに襲いかかったが、なのはは無詠唱でレイジングハートを起  
動させ、二つ目のジュエルシードを封印することに成功したのだっ  
た。

三人称 s i d e w n d

## 月村家へ

なのはは、友達のすずかちゃんの家と呼ばれていた兄の恭也も一緒に  
についてきていた。

恭也には二つの目的が、あった。一つはなのはに取り付く存在の監  
視と、もう一つは、愛おしい恋人に会うためだった。

二人は、月村家に着くと、なのはたちを迎え入れたのは、二人のメ  
イドさんたちだった。

三人称 s i d e

「ようこそいらっしやいました恭也様。なのはお嬢様」

メイド長がなのはたちに、挨拶すると、なのはたちも挨拶を済ませ  
ると、恭也は恋人である忍の部屋に案内され、なのはもすずかのい  
る部屋へ案内されたのだった。

「ねえなのは」

「何？直哉君」

「すずかの家ほんと豪華だね」

「うん私もそう思うよ直哉君」

そして直哉と、会話をしていたら目的の部屋に着いたのだった。なのはが扉を開けるとその部屋には、大勢の猫たちがいた。

「あ、なのはちゃんいらっしやい」

「なのは、遅いじゃない」

「ごめんアリサちゃんすずかちゃん」

「お兄ちゃんと来たから遅くなったんだ」

なのはがそう言うと、アリサとすじずは、クスクスと笑っていた。

そんな楽しい時間は、突然終わりを告げたのだった。

「なのはジュエルシードの反応が出たよ」

ユーノは、なのはに伝えるとフレット状態のユーノは外に飛び出していった。

なのはもユーノの追いかけて、外へ出て行ったのだった。

三人称 s i d e e n d

## 新たな魔法少女

なのはside

私は、ユーノ君の後を追って、ジュエルシードの発現した現場に、向かってる時直哉君が私に、喋りかけて来たのです。

「ねえ、なのは」

「何、直哉君？」

「今はジュエルシードのことを、優先しなきゃいけないんだけど、なのは僕のお願いを聞いてくれるかい」

「直哉君願いて何？」

私は、直哉君の話しを聞いて、私はジュエルシードがある場所から少し離れた場所に向かっていました。

「直哉君こんなところに来てどうするの？」

「なのは実はねここには僕となのはに必要な者があるんだ」

「私たちに必要な物？」

私は、歩きながら直哉君の言葉を考えていると、私の前に金髪の私と同じくらいの女の子が現れました。

なのはside end

一方ユーノは、ジュエルシードの影響で、巨大猫に追いかけられていた。

「なのは早く来てー！ー」

ユーノも野叫びが木霊していた。

## 運命の出会い

三人称 s i d e

「あなたは一体誰？」

なのはが少女に問いかけるが、少女は答えないのだった。

すると、なのはト金髪の少女しかいないところで第三者の声が聞こえて来たのだった。

「コラちゃんと挨拶ぐらいしなさいよ」

「え、誰ですか？」

なのはは、突然聞こえて来た謎の声に、驚いていた。

「ああ、ごめんね私この子の中に入ってるさくらと言つ名前の子だよ酔え惜しくね」

「ええええー」

(まさか直哉君と同じ境遇の人と出会うなんて)

なのはは、困惑していた。

三人称 s i d e e n d

## 同じ立場

三人称 s i d e

「あらあなたも私たちと同じ立場の人間なのね。あなた場前は？」

さくらと名乗った彼女が、なのはに向かって聞いてきた。「え、私の名前は……」

なのはが、答えようとした時、さくらによって遮られたのだった。

「違うわよ私の聞きたい名前は器のほうじゃないわ。彼女の中に潜んでいるあなたよいい加減出てきなさいよ」

(ねえ直哉君何で表に出てこないの?)

なのはが直哉に、表に出てこない理由を聞いてみるが直哉の答えは、帰ってこなかった。

「まあいいわあなたがあくまで私たちを無視するのならすればいいわだけどねジュエルシードを放置してまで私たちを追うなんて馬鹿みたい」

「!!--」

なのはは桜の一言を聞くまでジュエルシードとユーノの存在を忘れていたのだった。

そのころユーノは、ジュエルシードの力で、巨大化した猫の遊び道具として存在していた。

「ぎゃあああ」

ユーノの災難はまだ続くのであった。

## ユートと新たな魔法少女

ユートside

(はあ・・・僕はいつまでこの猫の遊び道具として、いればいいんだろっ?)

僕は心の中でそう思っていると、僕の張った結界が壊され、僕と巨大猫の姿が一般人にも見えるようになってしまった。

「キヤアア何あの巨大な猫はー」

「踏み殺されるぞー」

「ママーー怖いよう」

突如姿を現した巨大猫の姿を見た、街の人々は、パニックに陥っていた。

ユートside end

一方アリサとすずかは突如海鳴市全域に、避難命令が発令され、二人は避難を開始したのだった。

「ほらすずか早く逃げるわよ」

「待つてよアリサちゃん・・・きゃあ」

すずかは慌ててしまい、転倒してしまった。

「!!! すすか大丈夫？」

アリスは慌てて鈴鹿の元へ駆け寄ると、その直後二人の前に、巨大猫が姿を表したのだった

なのはとアリサとすずか

三人称 side

「キヤアアア私たち巨大ネコさんの餌に、なるんだー」

アリサとすずかは、自分たちに近づいてくる巨大猫を見て、二人は身動きがとれずいた。

そして巨大猫の爪が二人に向け、振り下ろされた瞬間桃色の砲撃が、巨大猫に直撃し巨大猫が倒れたせいで、辺りには砂煙が舞い上がりアリサとすずかは一体何が起きたのかを確認しようとしたが大量の砂煙のせいで確認することが出来なかったのだった。

「一体！！何が起きたの？」

アリサは、何が起きたのかを周りを見回すと上空に白と青のBJを着たなのはの姿を見つけたのだった。

「う、うそ！！あれがなのはなの？」

アリサはなのはの姿を見て、驚いたがアリサはすずかいらないことに気づき探していた。

一方すずかは、なのはの砲撃の影響で、巨大猫と共に飛ばされていたのだった。

## 騒動終結・・・そして

なのはside

私は、私と直哉君と同じ立場の謎の少女たちに言われ急いでジュエルシード発言場所へと向かいました。

そこで私たちが見た光景は、ジュエルシードの力で巨大化した猫が、次々と街の建物を壊していく途中でした。

！！

「直哉君あれ見て・・・街が巨大な猫に、壊されてるよ」

「なのはどうやら今回の相手はその猫みたいだね・・・なのはまずいよ状況だよ」

「え、何が？直哉君？」

「なのはよく見て猫がいる周辺を」

私は直哉君に言われ、巨大猫の周りを見てみると、そこには私の友人のすずかちゃんとアリサちゃんがいたのです。私は二人を助けるために少しかけに出ることにしました。

そのかけとは、この距離から最近覚えたばかりの魔法ディバインバスターを放ち巨大猫をアリサちゃんたちから離なすという作戦です。

「行くよ直哉君」

「ああ、いつでもいいよなのは」

「行けー！！ディバインバスター」

なのは s i d e e n d

なのはの放ったディバインバスターは、巨大猫に当たると、巨大猫は吹き飛び、その周辺は、強い風が、吹きあられ目もあけない状況だった。

なのははアリサとすすかの無事を確認するべく二人の元へいそぐのだった。

## 騒動終結・・・そして後編

三人称 side

「あれはまさか・・・なのはなの？」

アリサは、砲撃魔法で舞い上がった砂煙ではつきり見えなかったがアリサは声を聞いて自分を助けてくれたのは、なのはだと気づいたのだが、まだ確信には至らなかった。

そして数日後

アリサはすずかとなのはを屋上へ呼びなのはに聞いたのだった。

「ねえなのはこないだの巨大猫事件覚えてるわよね」

「うん覚えてるよアリサちゃん」

「ねえなのはさあんと私たちになんか隠してない？」

！！

その時なのははアリサの突然の質問に動揺してしまった。

三人称 side end

## なのはの秘密を探れ1

三人称 s i d e

「アリサちゃんすずかちゃん別に私は隠し事なんてしてないよ」

なのはは二人の質問に対し否定をしたがアリサはナノ八言葉を余り信用していなかった。

そして、アリサとすずかは、なのはと別れ家に帰る途中アリサはある行動をすずかに伝えたのだった。

「すずか私なのはを監視することにしたわ。そしてなのはの秘密を暴いてやるわ」

「ええー！本気なの？アリサちゃん」

すずかは、アリサの発言に驚いていた。

三人称 s i d e e n d

## なのはの秘密を探れ2

そして、次の日アリサは家の財力を使いなのは包囲網を完成させたのだった。

「ねえなのはもうすぐ連休だよね」

「だねどうしたの？直哉君どこか行きたいの？」

なのはが直哉に聞くと、直哉が答えた。

「いや僕は行きたくないんだけど昨日あった桜さんからの呼び出しがあったんだ」

「へえそうなんだなんて言って来たの？」

「うんそれが海鳴温泉で待ってるだってさ」

「それなら絶対行かなきゃね直哉君」

なのはがそう言うと、学校に行く準備を始めたのだった。そんななのはを見つめる一つの影の存在に、なのはたちは気づいていなかった

## 海鳴温泉へ

巨大猫騒動から数日後

なのはたちは連休で温泉へアリサちゃんすずかちゃんそれとすずかちゃんのメイドさん入れた人数で向かっています。

三人称 s i d e

「アリサちゃんすずかちゃん温泉楽しみだね」

なのはがそう言うと、アリサがなのはにこう言った。

「なのは、そういえばあのフェレットも連れて来たの？」

「うんそうだよほら」

なのはがユーノを抱えてユーノをアリサたちの前に置くと、その時、ユーノを見るアリサの目が、獲物見る動物の目になっていた。

果たしてユーノは生き残る事ができるのか？

三人称 s i d e e n d

## 海鳴温泉へ2

海鳴温泉についた高町一家とその友人たち一行は、それぞれの楽しい休日を過ごしていた。ただ一人を除いて。

その一人とは、ユーノだった。

(嫌だー女風呂なんて嫌だー)

ユーノは、必死に嫌がるがフェレット状態での言葉は、アリサにはわからずユーノの抵抗も空しくアリサとすずかの手により女風呂へと連行されユーノの悲鳴が響いたのだった。

「あはは・・・ところで直哉君少しいいかな話しても？」

なのはは、客間に帰りながら直哉とあの子達の事をかなしていた。

「あれ、なのは？アリサたちと温泉に入らなくてもいいの？」

直哉がなのはに聞くとなのはが答えた。

「うん大丈夫アリサちゃんたちには、夜一緒に入ると約束したから」

「そうなんだ。なのは僕の考えではあの二人は僕たちの敵と考えていいよ・・・今はね」

「それにあの金髪の子は、なのはより確実に強いよ今は、あの子達の目的がはっきりするまでかわりを持つのは、危険じゃないかな？」

直哉がなのはに伝えた直後なのは、ジュエルシードの発現反応を感知し急いで現場に向かったのだった。

一方ユーノは今だ地獄の中にいた。

（なのはー早く助けに来てー）

ジュエルシードとある人物との再会（前書き）

修正しました

## ジュエルシードとある人物との再会

なのは side

私は、ジュエルシードの発言をを感知し現場に向かうとそこには、ジュエルシードによって動いているドラゴンみたいな生き物がいたのです。

「どつしょう直哉君」

「とりあえず街に被害が出ないように、なのは頑張るって」

「うんわかったやってみるよ」

私が攻撃開始しようとしたらどこからか雷の魔法が飛んできた。

「誰なの？」

私がそう言うと、空の向こうからこの間あった金髪の少女が現れ、あっという間に、ジュエルシードの化け物を倒してジュエルシードを封印してしまいました。

「ねえあなたの名前を教えて」私が彼女に言うと、彼女は無言で私に自分のデバイスを向けたのでした。

なのは side end

再会と・・・

三人称 s i d e

なのはが、彼女に話しかけるが、彼女はドラゴンが暴れているのを止めに行き、なのはのもとから離れていきました。

「なのはひとまずあのジュエルシードの暴走を止めよう。あの子と話はその後で話そう」

直哉がそう言うとなのはは少し安心をしてジュエルシードの元に急いで行ったのだった。

なのはがジュエルシードに追いつくとそこには、なのはの両親がいたのだった。

(何でここにお父さんとお母さんがいるの？まだ旅館にいるはずなのに)

三人称 s i d e e n d

## ドキドキ秘密がばれちゃう1

士郎 side

私は旅館に着いて暫くしてから妻の桃子と旅館の近くにある温泉街に出かけていた。

「ねえ士郎さんほんとにこんな高い物買ってもらっていいのかしら？」

「ああ、構わないよ桃子。それにこれは私が君たちに迷惑をかけてしまったと時のお礼と思って受け取ってくれ」

そう言っつて士郎は黒真珠のブローチを桃子に渡したのだった。

私が桃子に黒真珠のブローチを渡した時、私は自分の目を疑ってしまった。巨大なドラゴンが私達を目指して来ていたのだったからだ。そしてそのドラゴンを追いかけてきた少女にも驚いてしまったその少女の正体が自分の娘のなのはにそっくりだったからだ。

士郎 side end

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7542u/>

---

なのはの中の少年

2011年12月11日03時51分発行